

ハンガリーを拠点とする赤いマフィア

盛田 常夫

ホドルコフスキー逮捕の後、*The Moscow Times*紙は11月27日付けの紙面で、もう一つの巨大企業Gazpromのスキャンダルを取り上げた。Gazpromはプーチン大統領の権力基盤の一つであり、エリツィン時代に経営陣や監督官庁のトップがさんざんに食い物にしてきた天然ガス企業である。年間売上が200億ドル（2兆円強）にも上るこの巨大企業は伏魔殿だ。タコ足のように延びた子会社、孫会社、あるいはその子会社、孫会社の複雑なネットワークを通して、年間30億ドルのお金が海外に流れていると推定されている。この横領に対処すべく、プーチン大統領は2001年にアレックス・ミラーをトップに据え、横領目的のダミー会社の整理を指令した。しかし、事はそう簡単に運ばない。2002年12月5日、Gazpromはウクライナの国営独占ガス会社Naftogaz Ukrainyと契約を結び、12月6日にブダペストに設立された資本金12,000ドルのEural Trans Gas（Eural TG）に、ウクライナへ送られるガスの販売権を認めることで合意した。これはGazpromのパイプラインを通して、トルクメニスタンからウクライナに送られる天然ガスにかんする契約で、ウクライナの国内消費とウクライナ以西への販売の権利をEural TGが取得する。Eural TGはGazprombankとVneshekonombankから、総額で3億ドルの融資と保証を取得した。

ところが、このEural TG、何と完全なペーパー・カンパニーなのだ。会社の4名の所有者のうち3名はルーマニアのクルージュ・ナポカ（コロジュヴァール）に住むふつうの市民。小遣い銭でハンガリーの弁護士に誘われて、オフショア会社の登記に名を連ねた。4番目の所有者はイスラエルに住所をもつゼエヴ・ゴードン。この住所にはキプロスに本社をもつHigh Property社のイスラエル子会社が登記されている。この会社こそ、ロシアの大物マフィア、モギレヴィッチの「合法」会社なのだ。さらに、このHigh Property

社のハンガリー子会社とEural TG社は、ブダペストの同じ住所に登記されている。もう一つ仰天することに、Eural TG社の代表取締役が、カーダール政権時代にハンガリー社会主義労働者本部の思想・文化人担当で名を知られ、文化副大臣まで務めたことのあるクノップ（Knopp András）だという。何がどうなっているのだろうか。

横領の常套手段

企業の資金を「合法的」に横領する典型的な手法は、子会社や孫会社を設立して、資金を流出させるやり方である。子会社のネットワークを経由するうちに、出所や支払いの性格が曖昧になり、横領資金が合法資金に洗浄される。麻薬資金の洗浄だけがローンダリングではない。体制転換の混乱に紛れた国家資産の横領も、れっきとしたローンダリングなのだ。国営企業の民営化転換で、どこの国でも観察できる現象だ。

ベレゾフスキーがアエロフロート航空の外貨収入を、自らがスイスに設立した「運用」会社を経由させる手法をとったのはあまりに露骨だが、Gazpromのケースはやや込み入っている。

ソ連崩壊以後、石油・ガス資源のない旧ソ連の諸国は、石油・ガス代金の支払いが滞り、ロシアにたいして巨額の債務を抱えることになった。Gazpromはリスクの多いこれら諸国の取引を担当する専門会社を設立し、これに天然ガスの販売を委託した。これがIteraと呼ばれる会社。もちろん、Gazpromの旧経営陣が裏で噛んでいたことは言うまでもない。このItera社が急成長し自前の油田を保有するほどの大企業に成長し、Gazpromとの関係が微妙になってきた。だから、トルクメニスタンからウクライナへ向かう天然ガスについては、Itera社とは別の会社でというのが、表向きのGazprom側の説明だった。

ウクライナ側はどうか。国の規模こそ大きいけど石油もガスもないウクライナは、ロシアが

らの輸入代金の支払いが滞って、債務が膨れあがっている。だから、西側に輸出される石油・ガスを抜き取ることで、急場を凌いできた。この抜き取りは密輸の源にもなっている。だからGazpromとウクライナ政府の関係が良いはずはない。しかし、トルクメンのガスにかんしては、後に見るように、双方の利害が一致した。

詳しい事情は後にして、まず2002年末に締結された契約によれば、Naftogaz Ukrainyはトルクメンから送られる年間360億立方メートルのガスにたいして、その価額の38%あるいは137億立方メートルをEural TGに支払う。他方、Eural TGはGazpromにたいして、パイプライン使用量として4億5000万ドルを支払う。Eural TGは残りのガスを西側に販売することで、年間10億ドル程度の粗利益が上がる。この儲けは誰のものになるのだろうか。もちろんこの会社の設立にかかわった連中が山分けする。最初から仕組まれたローンダリングなのだ。

腐敗するウクライナ政権

ウクライナのクーチマ大統領を支えているのは、Naftogaz Ukrainyだ。2000年1月、ワシントンでアメリカ-ウクライナ政府間定期協議を開催するに際し、クーチマ大統領は当時Naftogaz Ukrainy総裁だったバカイ（Igor Bakay）を大統領顧問として同行させる予定だった。ところが、アメリカ政府はバカイにビザを発行しなかった。マネー・ローンダリングにかかわる腐敗人物として、アメリカのブラックリストに載っていたからだ。

このバカイ、1990年代初めにガスビジネスを始め、トルクメンからガスを買う会社を営んでいた。Gazpromにたいして多額の債務を残したまま会社を倒産させ、さまざまな名目でアメリカの銀行口座へ送金し、親族名義の不動産を数多く購入した。FBIはローンダリングされた資金だと断定している。

クーチマ大統領は1997年にこのバカイを石油・ガス国家委員会の副議長に任命し、1998年にNaftogaz Ukrainyの総裁に任命した。1999年の大統領選挙資金はバカイが用意した。この時の金の無心の会話が録音されており、FBIの手に渡っ

た。西側政府の批判が強まって、クーチマ大統領は2000年夏にバカイを解任したが、バカイ人脈は残っており、巨額の資金を動かすNaftogaz Ukrainyはクーチマ大統領の資金基盤であることに変わりはない。

事情を複雑にしているのはウクライナ国内の政治的力関係である。バカイは西ウクライナを基盤にしており、ウクライナ工業地帯のドネツクを基盤とするグループとは競合関係にある。それが政府部内の抗争をひき起こし、事あるたびにクーチマ大統領の不正や腐敗が暴露される。ところが、双方の思惑や裏取引で、必ずしも腐敗暴露が政権交代に結びついていない。

このしぶといクーチマ大統領に打撃を与えたのは、ジャーナリスト暗殺疑惑である。他殺体で見つかったジャーナリストのゴガンジュ氏はクーチマ大統領の不正批判の論陣を張っていた。ゴガンジュ暗殺指令（2000年）を発した時の会話が秘密警察によって録音されていて、これがメディアに流された。この暴露以来、クーチマ大統領は西側政府から批判の矢面に立たされている。にもかかわらず、依然としてクーチマが大統領職にとどまっていられるのは、ウクライナ政権内部の複雑な力関係を物語っている。

Eural TG設立の事情

ウクライナの支払いが滞っていたことから、ウクライナ政府とItera社との関係も良くなかった。Itera社がいつの間にか石油・ガスビジネスの競争相手になり、Gazpromにとっても煙たい存在になっていた。さらに、旧ソ連の諸国への販売から利益が期待できないGazpromにとって、トルクメンのガスをGazpromのパイプラインで西側に輸出するビジネスはきわめて重要度の高いものになった。しかし、そのためにはウクライナ領内から西側に抜けるパイプラインを使わなければならない。だから、ウクライナとの協調と新たな販売会社の設立が至上命令だった。そこで、誰かがItera社に代わる販売会社の設立し、これで一儲けすることを発案した。Gazprom本社に大きな影響力をもつ人物が発案したスキームである。

この新会社を介在させるためには、ウクライナ側の承認が必要だ。クーチマがうまい汁を吸える条件があればよい。これにウクライナとロシア双方に顔の利くモギレヴィッチが噛んだ。彼はウクライナ出身でクーチマとも面識があることは、盗聴会話から明らかになっている。ウクライナ側の利害を代表して、モギレヴィッチが手を打った。土地勘と人脈のあるハンガリーに、会社設立を提案したと考えるのが自然だ。

他方、Gazprom側の取仕切り役は誰か。名前は表に出ていないが、チェルノムイルジンだと考えるのは穿った話だろうか。チェルノムイルジンは伊達にウクライナ大使を務めているわけではないだろう。説明するまでもなく、チェルノムイルジンは旧ソ連の石油・天然ガス省大臣時代からGazpromを取り仕切っていた。ソ連崩壊後にGazprom社長に就任した部下のヴィヤヒレヴとともに、Gazpromの資産を横領し、世界億万長者番付に顔を出すまでになった。チェルノムイルジンの息子ヴィタリヤヴィヤヒレヴの息子ユーリは、Gazprom資産の横領に預かった人物として知られている。ヴィタリヤは父親の命を受け、ハンガリーのMOLとGazpromの合併会社Panrugazの副社長としてハンガリーに一時期住んでいた。こういうビジネス・スキームを作り、Gazprom本社に承認させる力をもっているのは、チェルノムイルジン・グループ以外にない。

Knoppの正体

ハンガリー側の受け皿はどうか。Eural TG社代表のクノップは、父親が共産党員だった関係で、戦後、ロシア語で授業する学校で教育を受けた。だからロシア語は母語に近いものだった。1970年代にマルクス経済大学（現ブダペスト経済大学）の哲学講師から党本部に移り、ハンガリー社会主義労働者党本部の文化部副部長として、文化人の思想検閲に携わってきた。この分野の党の最高責任者であるアーツェル・ジョルジュやベレッツ・ヤーノシュの片腕として辣腕を振るったことで知られている。社会主義労働者党が解体された後、この男はいつの間にか、ハン

ブルグに本社をもつたばこ会社、Reemtsmaの旧ソ連圏の業務責任者に収まった。話はこれにとどまらない。ロシア内務省がInterpolに宛てた告発状は、クノップがモギレヴィッチのたばこ密輸に関係しており、この密輸を妨害する人物を消すために、モギレヴィッチがブダペストから3名のヒットマンをハンブルグに送ったと記しているという。

どこでどう知り合ったのか分からないが、1990年代の早い時期に彼らは懇意になり、クノップはモギレヴィッチのハンガリーへの移住申請の保証人になり、他方でモギレヴィッチはタバコ業を管轄するロシアの政府担当者にクノップを紹介するという関係になった。

クノップがどうしてドイツのたばこ会社の役員にまで転身することができたのか。誰がモギレヴィッチを彼に紹介したのか。明らかに、そこには国内外の旧秘密警察や旧共産党のチャンネルが働いていると考えなければならない。非常に醜いことだが、旧共産党や秘密警察の一部はマフィアと結びついている。というより、体制崩壊の中で、知恵のある連中が国家資産を横領して自立したマフィアに成長した。これが「赤いマフィア」と呼ばれる所以だ。

ブダペストのDohany通りにあるシナゴークの隣に、1990年代の初めにレストランができた。Scampiという名の高級レストランだった。お客は少なかったが、ブダペストに進出していたロシアマフィアが出入りしていた。そこで何と、当時の警察のトップが秘密裏に会っているのが目撃されている。権力と富の背後にある人間関係は、このように魑魅魍魎、奇々怪々としている。

なお、モギレヴィッチはFBIの最重要指名手配(<http://www.fbi.gov/mostwant/alert/mogilevich.htm>)人物にリストアップされている。モギレヴィッチが噛んでいると見られるこのGazpromのローンダリングにたいして、プーチン大統領は、どう対処するのだろうか。この種の資金流出が日常化していることが、今のロシアの最大の問題なのだ。

2003年12月

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)